



直すのはモノかココロか ～金継ぎとKintsugi

ケンブリッジ大学図書館 日本語セクション ロバーツ 平 浩子

2024年12月現在、Amazon UKでKintsugiと入力すると、700件近くものヒットがあります。そこには、金継ぎ関連書籍、金継ぎを模したアート作品、家庭で金継ぎを体験できるKintsugi kit (金継ぎセット) など、さまざまなものが表示されます。日本生まれの修繕の技法である金継ぎが、イギリスではどのように捉えられているのかを探ります。

はじめに

陶器などが割れてしまった際、「金継ぎ」という技法で修繕することができます。「金継ぎ」といっても、金自体には割れた破片を接ぎ合わせる接着力はありません。接着剤として使われているのは漆です。しかし漆は、ボンドのように瞬時に接着させることはできません。漆は乾くから接着するのではなく、空気中の水分や酸素を取り込んでゆっくりと固まるので、漆で破片を接着するためには適度な湿度と数週間から数か月という時間が必要です。また、生漆だけでは粘り気が足りないため、多

くの場合、小麦粉を混ぜた麦漆を作って破片を接着させます。このように漆で破片を繋ぎ合わせたものは「漆継ぎ」ですが、その後、繋ぎ目に再度漆を塗って、金粉を施せば金継ぎ、銀粉を施せば銀継ぎとなります(写真1)。

金継ぎや漆継ぎの起源は、実は、縄文時代に遡ることができるということをご存知でしょうか。そして、金継ぎは今やKintsugiとしてイギリスでも通じる言葉になっています。日本における金継ぎの歴史、そしてイギリスでのKintsugiの考え方を御紹介しましょう。

金継ぎの歴史① 縄文時代と漆

日本では世界的にみても早い時代から土器が発見されており、青森県の大平山元遺跡からは、紀元前13,000年頃の土器片が見つっています。縄文土器は窯ではなく、野焼きで作られたため焼成温度が低く(800度前後)、もろく、割れやすかったと思われます。割れてもすぐに代わりを作れるわけではなく(粘土で土器の形を作ってから野焼きするまでに数週間の乾燥が必要)、ましてお店で買

うこともできません。そこで、割れた部分を補修するために使われたのが漆です。福井県の鳥浜貝塚からは約12,000年前のウルシの木片の化石、また函館市の垣ノ島B遺跡からは約9000年前の漆製品(漆糸)も見つかっており、日本では大変古くから漆を活用していたことがわかっています。東京都の下宅部遺跡からは、漆を接着剤として壊れたところを繕った4,000～3,000年前の土器片が見つっています。これは「漆継ぎ」の技術が既に縄文時代から存在していたことを示しています。また驚くことに、欠け落ちた注ぎ口を漆で繋ぎ合わせた上に、その繋ぎ目に砂の混じった漆を塗って装飾した注口土器の一部も発見されています。これはまさに、「金継ぎ」の起源といえるものです¹⁾。

奈良時代の749年に、現在の宮城県で日本初の金(砂金)が発見され、ここで、金継ぎに必要な、器、漆、金が出揃うのですが、それでは奈良時代から「金継ぎ」が始まったかというところ、そのような記録は見つかっていません。

金継ぎの歴史② お茶の文化と漆継ぎ

インターネット上の多くの金継ぎの説明には、室町時代に茶道が盛んになって金継ぎが生まれた、というものもありますが、実は千利休(1522～1591)が生きていた頃の茶の湯の様子を伝える書物『茶話指月集』や『茶道四祖伝書』、利休の時代の名物道具を記録した『山上宗二記』などに「金継ぎ」とい

う言葉は出てこないようです。ただし、「漆継ぎ」は出てきます。織田信長が愛でた「三日月」という茶壺は、戦乱に巻き込まれ6つに割れたのを利休が漆で補修させてから益々価値が上がったそうです。しかし「三日月」は本能寺にて焼失してしまいます。現存する漆継ぎを施された戦国時代の茶碗の中でも「筒井筒」という茶碗には、有名な逸話があります。秀吉が愛蔵していた「筒井筒」を小姓が誤って割ってしまい、激怒した秀吉は小姓を手打ちにしようとしませんが、そこに居合わせた細川幽斎が歌を詠んで秀吉の機嫌を取り繕い、小姓の命も繋がりました。茶碗にはその後漆継ぎ[†]が施され、現在までその姿を伝えています。このように、戦災や人災で割れた茶道具は、漆で修繕され再活用されることで、それぞれが辿った歴史までも現在に伝えているのです。

では、「漆継ぎ」はいつから「金継ぎ」に発展したのでしょうか。本阿弥光悦(1558～1637)作の「雪峰」は、焼成中にできたと思われる大きなひび割れを漆で繕い、大胆に金を施してあります。最近では「金継ぎ師」という職業もあるようですが、元々は「塗師」という、漆を扱う専門家が金継ぎを行ってきました。「金継ぎ」が独立した芸術ではなく、修繕の意味合いの大きかった時代には、いつ、誰によって漆継ぎ、あるいは金継ぎがなされたか、ということは記録に残っていないことがほとんどです。その点、「雪峰」はその焼成



写真1 「金継ぎ」作品 東京芸術大学
三田村有純教授 作

[†]「筒井筒」には五片を漆で繋ぎ合わせた跡が見え、その後別の部分を金継ぎした跡が認められるが、その時期は不明で、当初は漆継ぎだけが施されたと思われる

中にできたひび割れに漆と金を施したということで、茶碗の作成者本人が金継ぎをした人物であることがわかっていて稀なケースです。「雪峰」が日本における金継ぎの第一号かどうかはわかりませんが、お茶の世界でも「金継ぎ」が施されるようになったのは、「雪峰」が創り出された江戸時代初期以降なのではないかと思われます。

金継ぎの歴史③ 江戸時代の焼継ぎ

モノ、特に陶磁器が壊れるのは、お茶の世界に限ったことではなく、日常生活の中ではよくあることです。しかし、一般家庭の湯飲みや茶碗が壊れたからといって、それを金継ぎ、あるいは漆継ぎで直してもらおうと思ったら、時間も費用もかかり過ぎてしまいます。江戸時代には「焼継ぎ」という技法が誕生しました。^{喜田川守貞}喜田川守貞が1853年ごろから書き付けた『守貞漫稿』には「焼き接ぎ師」の説明として、「昔は陶器の破損は皆、漆で補修したが、寛政（1789～1801）の中頃、白玉粉（鉛ガラス粉末）で焼き接ぐことを始めた。今も貴重な陶器や茶器の類は、再び窯に入れて焼くことを好まないで漆で補修して金粉を粘じる。日用陶器の類は焼き接ぎを専らとしている」とあります。「焼継屋 夫婦喧嘩のわけを聞き」という川柳もあるので、市井の人々も利用しやすかったのでしょう。文政11年（1814年）に書かれた『塵塚談』^{ちりつかだん}には「京都には既にあった焼き接ぎが最近では江戸にも入ってきて、瀬戸物屋の商いが減ったほど」とありますので、焼き接

ぎ師は繁盛したようです。

しかし、開国して近代化されると、陶器類も大量生産が可能になり、明治の中頃には焼き接ぎ師の姿も見かけなくなりました。そしてその後日本は、消費時代、使い捨て時代に突入していくことになります。

金継ぎの復活

筆者が子どもだった昭和後半（1970～1980年代）、「金継ぎ」は身近な言葉ではありませんでした。2001年1月4日の日経新聞（夕刊）には「金継ぎ、壊れた陶磁器漆で修理、リサイクル意識焼き物にも」という記事がでていますが、その中には「不景気も影響か」とも書かれており、金継ぎには節約の意味もあったようです。それが2011年の東日本大震災以降は、金継ぎの記事とともに「思い出をつなぐ」「思い出も接ぐ」といった表現をよく見かけるようになります。

最近はお茶の世界だけでなく、一般の人たちの間にも金継ぎが広く認識されていると感じます。全国にある金継ぎ教室では、参加者が自分の手で壊れたものを繕うことも可能です。最近では簡易金継ぎセットに加え、漆を使う「本格」金継ぎセットも売り上げを伸ばしているようで、自宅で金継ぎにチャレンジすることもできます。古くから金継ぎの伝統があり、博物館に行けば「本物」の金継ぎを見ることができ、あるいは愛蔵の金継作品を所有する人もいます。日本では、やはり本物志向が強いのだと思います。

イギリスの Kintsugi

2024年、イギリスの辞書の権威 Oxford English Dictionary に、新たに23の日本語が追加されました。Tonkatsu（とんかつ）、Karaage（唐揚げ）や Tokusatsu（特撮）とともに Kintsugi も追加されたのですが、その定義には「綿密に破片を繋ぎ合わせ、継ぎ目に金・銀・プラチナなどの金属粉をまぶした漆で継ぎ目を埋め、瑕を際立たせる日本の陶器の修復技術。また拡大解釈的に、不完全さを受け入れ、治癒を人間の経験の不可欠な部分として扱うことを特徴とする美観あるいは世界観、という意味で使われることもある」とあります²⁾。金継ぎの手法に関する説明は少し曖昧に感じますが、筆者が面白いと思うのは金継ぎの拡大解釈のほうです。現代の日本で金継ぎは、壊れたものを繕う技法、あるいは、その「モノ」から思い出される思い出を大切にすることができる方法、というのが一般的な解釈だと思うのですが、イギリスでは「不完全さを受け入れる」「瑕とその治癒の過程を歴史の一部として扱う」といった、禅的な（？）考え方が前面に押し出されているように感じます。

実際、イギリスのインターネット上で Kintsugi 商品を検索してみると、多くの商品のパッケージには 'Nothing is perfect, perfection simply doesn't exist.'（完璧なものはない。完璧などというものは存在しないのだ）とか、'Celebrate imperfection by repairing your own ceramics with gold.'（自分の陶器を金で繕って、不完全を祝福しよう）

といったメッセージが印刷されています。イギリスでは金継ぎの目的は、「モノ」を直すというより、「モノ」を直すことにより「ココロ」を癒す、強くするところに重点が置かれているようです。

この考え方を体現したようなプロジェクトが、2022年から2024年にかけて行われました。その名も 'Kintsugi People Project（金継ぎ人間プロジェクト）'。これは元ケンブリッジ大学講師で心理セラピスト兼芸術家のキャロル・ホリデー氏が、写真家のライアン・デイビス氏と行なったもので、身体に傷のある人がボランティアで写真のモデルになり、その写真に写った傷跡に純金を施してパネルにし、主に大学病院などで展示するというプロジェクトでした。このプロジェクトは2022年のケンブリッジ大学病院であるアデンブルックス病院での展示を皮切りに、オックスフォードやエジンバラの国立病院の展示スペースで行われました。最初にこのプロジェクトを知ったときには、「人間の傷跡に（写真上であっても）金を施して見せる展示会なんて、金継ぎの拡大解釈が過ぎるのではないかと、違和感を覚えたのですが、このプロジェクトの説明には「Kintsugi とは金などの貴金属で壊れた陶器を補修する日本の技術で、これは（心の）内側と外見の両方の傷が癒えるプロセスにも通じる」とあります。また、ボランティアでモデルになった男性の一人は、「最初、私は自分の傷跡を忌まわしく不愉快に感じ、10代の頃はとても辛かった。しかし、今、それらの傷は私の一部であり、私の人

生を語っている」と証言しています³⁾。なるほど。それは確かに金継ぎに繋がる考え方だ、と思えました。

Kintsugi をやってみた

イギリスのオンラインでは接着剤を使う簡易金継ぎが主流で、漆を使った一般向けのセットは見つけれませんでした。扱いが難しいという理由の他に、イギリス人は日本人ほど漆というものに愛着や親しみが無いのかもしれませんが。簡易金継ぎセットで接着剤として使われているのは、主に化学薬品を使った接着剤と、カシュー油から採れるウルシオール（カシューナッツはウルシ科の植物）を使った植物性成分の接着剤です。後者は食器などの補修にも使えるというので、筆者も2つに割れた箸置きを繕ってみることにしました。

オンラインで注文した金継ぎセット（写真2）には、‘To make perfectly imperfect’（完璧な不完全を作るために）と印刷された道具入れの袋が入っていました。小皿にカシュー油由来の接着剤を取り出し、金色の粉と混ぜ、それ



写真2 イギリスで購入したKintsugi セット

を箸置きの割れた断面に塗り（写真3）、2つの破片をぎゅっと押し付けました。すると継ぎ目から余分な接着剤が押し出されて太い金色の線を作りました。伝統的な金継ぎでは、破片を漆で繋ぎ合わせ、数週間から数か月経ってしっかり繋がったら、細い筆で継ぎ目に漆を塗り、そこに金粉をまぶして継ぎ目を金色にします。したがって継ぎ目は細くスムーズで主張し過ぎず、洗練された仕上がりになります。翻ってイギリスの金継ぎでは「不完全を祝福しよう」といっているぐらいですから、継ぎ目からたっぷりとはみ出した金色の接着剤もよし、ということになります。しかし、筆者の好みとは違っていたので、はみ出した分の接着剤を布で拭き取りました。すると拭き取り過ぎたようで、2つの破片が離れてしまったので、また接着剤を塗り足したり、拭き取ったりして、その後2、3分でなんとか2片がくっつききました（写真4）。

最初は「本物の金継ぎには程遠い」とか「洗練さが感じられない」などと思っていたのですが、始めると楽しくなってきました。そういえば、何年も前に壊れてしまったのに捨てられなかった陶器のサンタクロースの飾りがあったと思い、引っ張り出してきました。5つに割れた上にかけるが一つなくなっていました。繋げられるところは繋げて、足りないところにも金色の接着剤を塗ってみると、割れっぱなしではないので、これはこれでよし、というような仕上がりになりました。クリスマスの飾りなので、



写真3 割れた箸置き



写真4 Kintsugi した箸置き

繋ぎ目からたっぷりと金色が見えていてもよいかもしれないと思うと、気楽に kintsugi を楽しめました。繕い終わったサンタさんを何年かぶりにクリスマスツリーに飾ってみると、心なしか喜んでるように見えました！（写真5）

だからといって、「私は ‘完全なる不



写真5 Kintsugi したサンタクロースの飾り

完全’を作り出した」といった実感はありませんが、みつともないから捨てようかしら、と思っていた箸置きとクリスマス飾りは、これからも大切にしたい、という気持ちが増しました。

終わりに

日本とイギリスでは、ウルシという植物や、漆製品に対する愛着や親しみ、金継ぎに発展する漆継ぎを育んだお茶の文化の捉え方、政治のあり方や経済活動の違いなど、さまざまな違いがあります。それでも、今、どちらの社会でも金継ぎがブームになっているというのは、面白い現象だと思います。金継ぎで「モノ」を繕って大切にすることも、「ココロ」を癒すことも、両者はどこかで繋がっていると思います。「モノ」を大切にすることは、人間や生きものを大切にすることにも繋がっているからです。

参考文献

- 1) <https://www.city.higashimurayama.tokyo.jp/tanoshimi/rekishi/shimoyakebe/urushibunka.html>
- 2) https://www.oed.com/dictionary/kintsugi_n?tab=meaning_and_use# 1416009670
- 3) <https://www.facebook.com/CUHArtsNHS/posts/ 597388785271043/>